

郷土の懷古

郡 陽

寛

日本が大陸から離れて日本海を距てた島となり、また北海道が切れた時、本州の最北端となったのは、我が青森県である。当時本州には中央山脈その他が隆起し、噴火や陥没が繰返えされて現代の地形に近くなり、やがて人間も住み着いて石器時代となった。その遺物である縄紋土器その他は、県内は勿論、日本各地にも埋没されている。遺物の発見される所は、当時の水辺に近い所である。勿論土地の昇降や津浪の襲来などによる地形の変化が屢々あり、また長い周期ともつ氣候の変遷もあったので、今は昔のまゝの地形ではない。然し兎に角縄紋土器の時代には、殊に我が地方は人口も相當に稠密で、氣候も割合寒くなかつたものと思われる。

所がこの地方にはその後の弥生式土器の遺物は極めて少い。たゞ田舎館附近に縄紋弥生両者の中間型を示すものがあるそうだが、何れにせよ古代遺物の

分布状態は日本中南部の夫とは同じでない。或は縄紋時代がこの地で繁栄した時に大津波や土地の昇降が起り、更に氣候の冷化も加わり、として、一時住民の大部分が滅亡したのでないかとも思われる。かような栄枯の波が或は幾度も繰返えされたのかも知れない。兎に角縄紋から弥生時代に亘る遺物の連続は、將來或は見出たさうかも知れないが、今の所この地方には余りなく、発掘物は直ちに大和朝のものに移るようである。

その頃の居住地は、次々に水辺を離れて小高い火山の麓野や広い河原または谷合へ移つて行つた。元来日本島は氣候温暖雨量充分であるから、土地のやや高まつた所は早晩森林となるのであるから、当時の人類は容易に森林を南拓することが出来ず、精々噴火して出来た麓野などが居住に適した高燥地であつたのである。食料には奥介は勿論、野獸も多くは、耕作や飼育も多少は進んでゐたものと思う。

人間が住んだ頃の郷土は、地質的に見ると、その東半即ち奥南地方には火山灰地帯が多く、恐山地方とは丘陵でつながり、東の風浪で深山の湖沼も出来た。之に對し奥の面半は、當時未だ若かつた若木山

と津輕山脈との間に日本海が残り、之から次々に昇
凡山と津輕平野の隆起を見た。この際先ず岩木山の
流砂口、堆積すると共に西の凡波にわかれ北に
伸びた砂丘となり、次々に植物に覆われたが、この
植被には、恐らく人間の仕業で諸所に傷が出来、こ
の傷口が元になり新たに砂を吹き飛ばして東方へ同
路を作り、落付いた砂丘が削りとられて凡山の丘陵
に分割され、その間に口湿野沼沢も出来た。一方日
本海の入江は諸方の山根からの流砂に埋められて凡
津輕平野と岩木川水系とに分別し、田老沼や十三沼
を弄して広大な芦原となり、本監村以北は徳川時代
になってから漸く開墾された。尤も地下に大木の幹
の立ち残っている所もあると言われ、或は一部隆起
して森をなした所もあったものと思う。

かような経緯をとつたのであるから、津輕平野の
村や道路は昔は左ず山根に沿うて発達した。私は三
十余年前に、當時の中里村の東方半里の山根のある
宮野沢村に行ったことがある。この村に口津輕地方
の金取の外に、全く変わった金取がある。面いて見た
らそれは江州首領そっくりのように思われた。而か
もこの金取は中里その他の近村にはない。この事実

は、津輕地方が日本海を通過して早くから近畿地方と
交通していたこと、津輕平野は昔は芦原であったの
で、住居も交通も左ず山根に発達し、岩木川沿岸の
村々もそれより遙か内れて発達したものである事を
示す、即ち地理的にも歴史的にも発達の経路が窺わ
れる訳である。

十三湖の北岸に鎌倉時代福島城の繁栄したことは
遺跡にもよく知られている。勿論東北地方全体とし
て見ると、中央との交通はそれよりも遙か昔の土羅
夫時代以前から行われていた。そして中央からの文
化の移来は、太平洋・北上川及び日本海を主とした
ことは明かであるが、この際最も早く傳来したのは口
神社俣園の建築様式、僧侶や旅商人の往来であつた。
また中央の為政者の興廃に伴い、販賣の多くは流転
してこの地方にまで及び、住民の文化の向上や血縁
の分布にも役立った。また土羅夫以来の諸將軍が凱
旋した時には、軍兵の多くは途中に奔之れて土着民
となつたようだ。この頃から口尚お難題・朝鮮・滿
支との交易も屢々あつた。南北朝時代には西朝の宣
臣、善族等は集団の移住があり、之等はこの遠い所
までやつて来ても昔の系統を以て敬視し、二三里

の所にも館や城を築き、戦国の様相を現わしていた。
県内では中央山脈は東西両地域の交通を少なからず阻害した。然しそれでも山地を通じて二三の路が開け、戦争やその他による往来があつた。所が徳川時代になつてからは政治的に東西が遮断せられ、直路も荒廃し、中央からの文化の受入れにも夫々の差を生じ、かくして三百数十年、言語や風習に種々特徴の差を示すようになった。明治以来は鉄道や自動車交通が頻繁になり、県外との交通が容易になつたが、江戸と弘前を結ぶ直通路がまだないので、民衆の往来融合にはまだ距りがある。そして之は県自体の實質的な進歩を遲滞させる條件の一つとなつてゐる。

我が県の歴史は有史以前は勿論、有史以後でも的確な文獻は割合に少く、将来の調査研究に俟つべきものが多い。